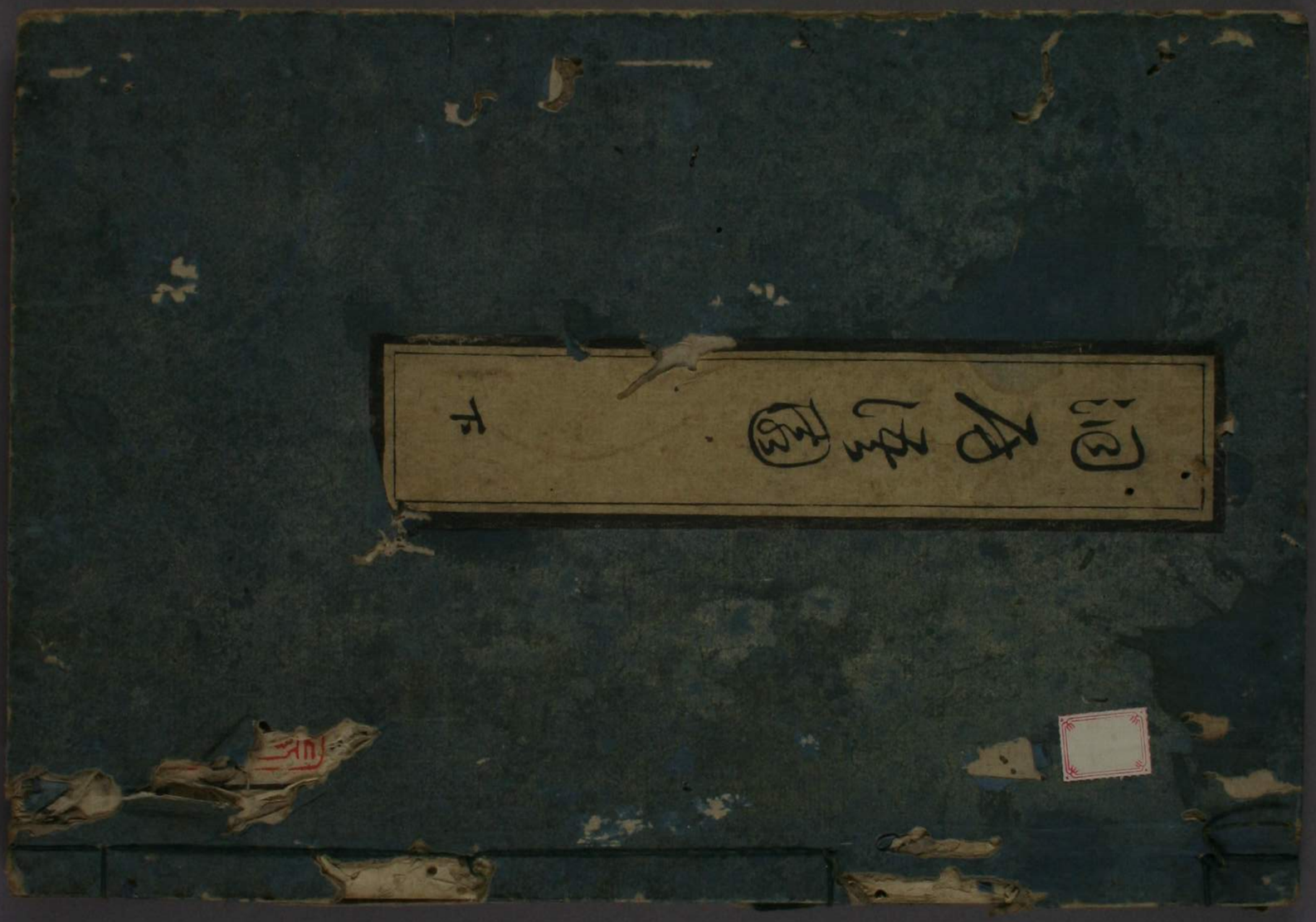
KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT



洞房語園集下

凄嚴辞 一章二段 並木壽見

艶廓仲の町乃東方ハ五町の揚迄君床着のまゝれつくろひなし。素顔の嬋娟好ものも多く。いづれ姿見をまさるハ寡しちゞらの單帯立とけなく結びさげ。衛ハ紫子紫金了淺黄ホ思ひく。色くのきぬく是を後朝の市ともいまむ。あるハ用ある幾ニ呼入さ杼。あるまで滴あるまで盃ハ酒肴ハ杼ゝ狼藉をきわ。まれや二日酔の正銘双き杼の世界かおく。居続ゝ常の為札をと又腰の物ニ付るをあわ。或ハ旅人と呼ゝ客の一夜蹉別乃餘情こ満やうに再會の

58 2144

期を約束して。注く涌る球紅ぐさ（パ。ぎ〳〵注上戸のよ）
傾城ハ大門口を連てつゝ。数声のおけ〳〵だくみ。後ロ
影のなくなるまで。袋ふ土手の方を見やりて立居るハ
あの帳振山よ洞つゝひ狭狭姫山高やう万ホ馬のあひ虎が
併を。かゝやとゝ鏡ハ思ハれ。を屋を吉原の風流。鉦中
仲の町乃曙ふあり。漸あるまゝ次日を淡茅ヶ原の梢ホのがを
大門の時計三つ三つ鑿ハ。寝ゝ〳〵まゝ起乃ちち足出し
て帰るふをわ表して。桑門の零余頭陀の蜂商。施米ハ
き。ぎゝ〳〵てあけのムあるさ淡異やゝに豪味し。或を部屋
仮乃を意のあれ長袖し優長あるや衛ハ日ゝけを涌る

もあるをわ弦白人目と思ふの洒ことゝ。約束の日ゝ多人
寸。太鼓未社が曲徒して。物屋入をれハ内ゝあをいを寸。ふ
の日ハ七閑明るふ。里ひ川拭面乃あ徒だ。永き日も〳〵て
く谷中上野の梯猪。淡茅道ハ姫ゝあ〳〵。あれハ何のお屋
補て。袴ゝ汁主と徒者。ふをつゝ第崎の。船宿へ
ハもあり。ふゝ体悔ゝ遊おハ。戸明ゝ駕ホ飛のを褌ボ
ゝの部を去らせ。二挺立ホうち祭てハ。流ゝはゝのゝて
艦ハ乗を。赤い火縄の一寸一里ホ。舟ハ待乳山の蓮イ
着ナを。皆ハ衣仗坂茅を。ゝ不ハ。ゝ乃寸。永き日も心ゝを
とゝ拭。をゝ〳〵ゝ。ゝ提を

風流帰去来の古登波　　末野一氣

かよひなれいさと。ゝもの国恵を拾ひのう。夜見世の盤桓
を心がけ。歩行すらしてゞゆくと。莫昏に大門口に入レ
先あまと立つどし。換郎乃袂不すぐわ。姉ぐめん体うゞひ
編笠は脱く。初ゝしく化粧。腰乃人。不禮千万と叱るも有
弱来の客を結りて。唱く茶屋へ居れりもあり。はなきい
笑ってきちもやあぬ。あほハ先つけられて。迎ひ乃ありして
引ぱられ。ぱーも立てこの女男のちへさ紀先ゝ居たちぐんで
胴巾を押へ笠はゝ。京町の方へ嬉れ行も異と興あわ

てゝ。既すして日暮ぬ。仲の町東西乃茶屋毎に。沐棚に面
に提へ。数の燈明を挑ぎ。錫の瓶子きゝくと光ゝて
がゝくゝく潔ゝ。是に心澄て。ちぢゝく戀慕愛執乃
念も形くなわ。ぱ。ぱ。ぱ。ぱくゝ大あんどん燃し連て一度
に弾ゝて。菅檻ハ。ぱゝ急雨の降中ゝ。ゝかとうゝれ
嘈ことか面ゝ。錯雑と。かきゝ。意うきれ什
ホ騒ゝ。雑くゝ体魄くゝ。左右ゝ。ぱゝを盤桓
跌蹴。二町目の中れと何屋ゝて。ぱの裾袴揺がゝの双帝ゝ読
ぎゝ。時ゝ新ゝけゝ。あぱぎゝつきゝを尽ゝてぎゝ
いぎゝ。ゝて角町へ。ぱあき雨側いゝくゝ見物して新町へ

ゆき。建出の格子造にて。裏風うちよ一曲ふ聞あれ。嘆うた
益斎栽乃家をあけ。京町の中ほどまで発ぶ
ぶ。なく何ぞを祝いうも。内部乃家ハ海ぶろハ。二町目へ
祝でうん。この紫と名ぶるか。きりの別楽の見世ぶ乃ぶ。
のな棒ぶく高げとく。祖寿四つの柏子木とおだ。扇ハ
ちぶ越きたちて。あうと一度ハ鄙ぶく音うう海ぶ
唱ふれも。往還俄て吉閣ふあり。寄ぶ灯の光遠よ絵り
おしけもおくあり。寂寞しく女郎買むと男ふ念も
うせ如。二人の遊客目と目と見合せ。かうふ王子猷
のを呼出し。乗興来り興尽て帰うとはづやき。もごくと

大門のあへ出ぶら又帰去来と。下戸性のうちんがの厚ぶ
口なる酒しし

文中ま建出の格子乃内ふ夷色唄ふと出し建出ハ家名し
井筒みよしとて朗細ぶうり名をうりし格子女郎
新町南ふ角主ハ山本平右衛ぶ元禄年中鎌倉へ転通

別世のうちを　辰英門　呉丈

ぶ早歌ぶう者のことを祭て。内の鐘がうぶんふ碎ぶく
ちぶくぶ打ぶくおうよううと。うきふもあり。ふるとハをのう夷
とよふし寄も。あうあ居しくとて。今ハ西徳寺乃鼓を地上
の別ぶよ用ひ侍ふ。大清屋鋪の下地きふ打ぶくことあり
打ぶ叩ぶを打ぶく。出ぶく酒ふ乃ぶ半醒半酔の目ハうう

うつゝと。青ハ白ハ乃ろうちもなく足ハちとりとやらいへるもの
にて。蛛がきを引ぞのかせやまする燈たどくしきや。まくれ果
ぬ萩なしれや。笠に隠れ頭巾に忍なす。月ハ眉に似くこのかげ
新まくらを思ひ出し。蚊ハ道に二つ三つ帰りて。三絃の残響
いとおもく吹ゆ。或ハ人待ッ軽に引あかきてハ刀にそゑとうち
て笑ひ。腐て居る舟者の莚に津ずきてハかごで荷ッ
毛雷のふり行す。川こうちまでやこゑあれや。扉によろし
く雷いまろく一しほ。嵐にハ面白く思ハれく。縁り香の婦く
白ひ出る。香袖なりもしまなり濡るゝ見るかし。白露
濃こやかなる。七夕にかしつる羽織乃かしけるゝ。高燈籠の遠く

梢に鈴虫が淋しき。まつて長堤草徑の別路。秋の螢飛
で泥ハ路に帰るゝ也。野の草をわけれこの里飛ぶを
又立まち添こ。つ纔し紅園のまさ酒袖さびて。きちこの大
つまろに灯火けへ落ち行ぬ。おぼれし酒の香ふきもせく
猖狂しまじく。海棠の花睡たるにつけ花の本に帰るん
事を忘れぬ風し。掃除ま清影に其のくのみいへ至て。
中るい又堤下の在れぞ。夜色まちまち変して。旭光東
にうすづき。霧のかきて草もとのこゝろよにかわき。霧晴
て筑波山あらし。夜に緑の行細川乃なれ青も。障子引
灯あらふ流れくまうで。慈人の消す去はらくもそあるき

光陰八百代の過客なりと。日は百の旅にして世の来
り。女房買の為にを頼まれず。白髪は日も重らず欲
土手の稲葉の風はなし。ちらつく雪て膳ホまれまし。心濃き
晩て。蹇でこの一ろ逢いなの紙を鼓。ヨく雪蒟蒻賣て
はなれあり明

蕣の屋敷まろ毎 [illegible] 見む

市中嘉遁の辭　其齋

予ら住む地八廓ホ名立る。旭の菴ホ住きく閑を求ム

嘉ホ[illegible]紀の者。奥ホ念佛の者ことすあるに侍る。
誠て大隠八市ホ住[illegible]。香八其類[illegible]。
愚ホして三の[illegible]を撃[illegible]書の徒。小庭ホ舟あ者
風枝蕭颯[illegible]あ[illegible]。枝を撓め。蕾八晴て[illegible]。畫八鳥ホ
[illegible]ホ虫の[illegible]。蜘蛛く
風[illegible]。[illegible]。逆の夜を結ホ方何
里欲[illegible]く。木毎のまづ[illegible]。蓬風自[illegible]。方尺の地
も[illegible]書[illegible]。の寓云[illegible]似[illegible]。窓
の前て茅ホ納む

町ゝも嘉嘉あり書蟬の一名

松虫辞

乾什

松虫の音不友を思ふといつまさんふ六日九月秋の
小原さ。自少半ゝ。虫の音あるゝと物好まる。乙酉春
蕭々乃ゝ琿丈八屋より離て居ゝ。一菴のうち寂寞人
ゝ。廬山の秋乃雨を出す。五湖の舟賃を費さず
て。胸中萬里の趣を遊ばしむ。三人静を守て獨ある
のみゝ。是自況の真実なるもの也。是中興味朝

てをみ得面ゝ。亦楽しうすゝ松虫の音不友を
思ふと八ゝ

松虫

松虫や拾ふて乃られた主乃物

制て幸七ゝ八ゝ。花窓茅籬のゝ。菜を呑むも
日不百を表す。のゝ。おゝさわく蕗ゝ抜あれた。衾上イ
句を吟じ。後ゝゝいてゝうゝふうゝつて曰
黒谷の古坊八拙ゝ後心。香煙家八文夜ゝ
ちゝの蕗覚ゝ。四ゝ八ゝ引ゝ。喜の夜ゝ
ま十と思八。秋乃名ゝ七夕さゝも七ゝ対ゝ
あゝ淋ゝ地蔵の自影。ゝゝく七八ゝく風雨舟

中ノ客天上樓臺人まねくハもとも易し

ふかき忘れぬ老の川

憎む毛を剃て硯拭洗ふなり

鏡池辞　山田其乙

浅茅ヶ原鏡が池のほとり心月庵に隣れる方丈の蓬屋に住む侍者あり。姓は佐々木氏にて亂舞狂言名の象ありし人なき壮年の頃吉原へ通ひしころの花かつらといひし遊女にあひなれ。露霜をいとはず

あまた以て古めし客も中閑も往来なりしかくて佐氏ハあるじしハ詫さすも始めしくしと思ひきハまりて世乃勤息りかちなるをいたく歎き立西山のあるさとにこめてよりくハなけき出しが物ならふ身の程をとくて不落といふやまふに悩みを婦て今端の時佐氏イひ為ひていて曰主も妾が言を容なハ妾果て序早くかの里の里の人を迎へておいてあひその後を止まへといひ終りて果段この情貞節の識を感せし人をいたしも世に伝えし程ハ去年月日に譲り書の諷詞を捧げるに表は梅ろに甲斐ろあまりしをハ更に續をおの

香も猶めづらしうぬるものと従ひしもなごりたる柳の
糸のみだれむかしワスリヨスきし殿の袖乃香昔思ひし處を
旅ふる所しもあきて又異岩を探へて石に泣かなひなれ
むかしさいつはら庭まで呆し由と揚屋何某か許より
出せるか花人の至て嬉しきまゝハ泣いろて悲しき
小八姿のもし川佐氏ハ急中書居しぬる所の忙に捷て泪も
出す酒あさめさせそ三盃かしふけ　紅花春日一紅錦
繍山といふより一時染色貪著思不浅一時聞聲愛執
心最深思心言口成妄染縁迷六塵境作六根罪とも
見ゆる所云ふまふ心ある斗と江口の曲詠はれまして

髻を拂ふて道仲と改名し着なれし素襖袴とたち
すて麻の墨染ふ改めつゝ鏡が池の好き所に庵を結び隠遁し。法
華の系の杉風に煩悩の夢を晴らし。隅田川のまめ清流
に愛着の垢を濯て。仏法にふまつわる他事なし。
あるが中に道仲在俗の時。風雅に志ありしかバ。勝地古跡
の名の泯絶せむ事を歎まじく。鏡が池ハ梅若丸の母
妙亀尼鏡を抱きて身を投し池也と里人の語り伝へ
まて。周り百歩にたらぬ小池なるが。荻小埋りて蒹葭ひろし
くなれ。荻を拂ひ蒹を刈り捨て。池中に辯天の小社を建立し
妙亀山ハ法尼の古墳乃跡なりしを一字の堂を建立し

事ども又新に一口の法りかたりを編て。其銘に古跡再興の
こゝろを誌す。是より隆盛。法華の教化。
明礼の様人も。続ぎ池の義表にぬぐつきもの。如去尼後焉
のむしりを洗ひ。如去尊に木鉢を打明て。木母寺乃
大念佛に結縁す。もゝ〳〵絶るとつぎもゝ絶るを起し
と。明主人君の徳行とも。是仏翁道学の後も。風雅の
正風体を忘れず古跡再興の志。誠に殊勝の義心者こ
そ。且又佛事勤行の閑暇に。夕日の社地に杖を引
初夏をゝ紀。禁酒と並び茶ゆゝ。雀ぶくそん自在天
まて約あげてゝゝの。或時ハ砂漠地の園圃に茶菜

を摘。もづゝゝ義とし。八珍を羅ゝゝも口に適ふ
を是ゝゝ美し。唯方丈の艸菴に膝あゝ易ける
とゝの〳〵紀。明暦戊戌七月廿七日古希の齒ひを金〳〵し
て欣念の床に上に面西しを念ひて永く眠る。西方十万
億土も遠しとて。縄索の乙百羅漢へや往ゝ
一日神明宮窦前にて
鳶帽子若ぬ神代もゝ商初業ゝ　道仲

享保庚子三月五日山田其乙淺茅ヶ原碩傳菴に移んて
鏡池辞を作る古跡再興の始終具まれ続池の記と兼
て道仲を吊ふのこゝろ道仲ハ蒙氏なり寛永年
中花ゝの粗ゝ古ゝり名称挙ゝ者や因縁文中にゝゝを
含む

西箇原祥林寺碑

補陀山祥林寺の観自在菩薩ハ、世に枯木の観音と称する由来別記に具し。文明中左金吾源持資入道道灌居士。此山を創啓あり。鳥の翬ぶごとしより以来。今に至るまで二百五十余年。物換り星移りて蘭若とく荒れやぶれぬ。現住塲信和尚始く勝地の蕪穢と。蕭寺の頽破とを歎き。村老と共に再復のことを謀る。炎暑厳寒越屑せず。風雨に沐し霜雪を嘗め。東都の市店に分衛し

普く信心の檀信をつのり。一銖の功積て遂に一宇を建立す。ここにおゐて大士の慈光かさねて曜き。祥林の甍茂くして興りぬ。時に金龍南大門の邊り一人の佛工あり。法橋廣瀬高山といふ。嘗此菩薩の霊徳を感じ。ひとたび此寺に詣て。尊像を拝しまつり此像の霊威叢寄すること人に示しくあらはすに称まつりて後をゆるさず。先をかたりて老佛師言快々としてしく携る乃ち之を数し。別に一百日を期として。復此寺に詣て。遂に菩容をねし繕しく自ら柱もつくり。霊威儀を手として。慈光脚を射る。むかし尊なる数々を称まつるやと思ふまことに一軀の

[illegible]形を模し刻し。[illegible]龕前に奉安す。[illegible]蓋後の人乃諸[illegible]
[illegible]意[illegible]ア、現[illegible]カ[illegible]佛工や實馬[illegible]
[illegible]銘曰

補陀梵刹　慈光再隆　新顯舊密
維圓維通　天運百億　人和地豊

享保十六辛亥九月勝日

庄司道恕謹彫

寛文何年の[illegible]小澤何某[illegible]酢[illegible]老父の叱
[illegible]暫く涙[illegible]の御佛師高山[illegible]親友[illegible]
[illegible]涙[illegible]尋[illegible]小澤氏[illegible]
紙帳の中[illegible]

[illegible]一聯を作て曰

昔遊揚屋絹蚊帳裡樂餘觴
今栖裏棚車箱弁中患癘瘡

元文二丁巳十二月廿八日大佛師法橋高山卒于時八十八才大佛師
五七日ニ當リ日追善ノ句三〇麩ノヤキハ浄土ノ春ニアリヤナシ〇高山
在世ノ昔春ノ待ニフケニ千德ノ質ニヤリ麩ノヤキシ誂ヘレ[illegible]アリケリ世ニ
良工ノ一僻古今ノ通例也

善雅老隱和尚初視于芳原之艶風感有
可憐可喜可羨可笑者而遂賦長篇一章
乃示之於予予以頻責其和予也不才矣豈

可堪攀高礎哉雖然知予之寓所以隣桂芳原而屬之亦何可辭之乎卒不得默止狠應需爾

柳塘隱士

江左都門北　華街幾追尋
美人粧白玉　佳子擲黃金
嬌態千夫惑　姝顏萬客臨
洞房何處曲　籬郭孰家音
傳陌朱唇韻　逼雲皓齒吟
晝思翡翠席　夜娛鴛鴦衾
豈有風流薄　當看妖艶深
鄭觳兮衛色　恐是古猶今

牡歌

山本の徐山といひし、江都にも少えあり、桂女なり大門口多太米つくり、扇屋ゝ幸にて、或大人、井戸井ト養子を誘引あり、山一座にて大人ゝ至あり、ト者ゝ石席ゝ

おかしけれ　ゆ　ゑ　ゆ　エ　ト　ま　い

義酒　ゆ　ゆ　ま　ま　名　傳　錢　の　き　き

貞享の頃田町ゝ小家ハ乞食といふ者あり、三味線の所ありて、娘家貧の醜ゝ、二十計を嫁せ

一時灯心商ふ者とつい合せ祝の詠を出奔せしを
八条主後〳〵久雄〳〵多年中間並木嘉兄弁
狂言の下

ぬすまれし姫ゝ中ハ海老尾
皮ハ下ゝつゝかうゝハ乞剤

召仕ひし下女米揚男と夫婦の約束しなれの米蒔
ハ通ふあり〳〵在所鎌波へ引とて下女ハ暇乞し
婦ひとおれ下ゝ正へ妻よせしをいひしがうの事もクつて
理ゝ子の実母一在所より友なる求つき来りて彼ものハ
伯父ゝ許へ聟入しあるわと告るを時嘉兄紋の狂言
あり但下書省の狂言集ゝ入りつゝ此分嘉兄任
方多異ゝ

寸情契を去先の涙きたて

こゝろのくとまつ人うゝ哉

ゝゝ揚ゝ流るゝ川のうゝをゝ山内勝山
ゝゝ埜ゝ袖を濡れ

杉ゝゝ出る花ゝ逢ゝ人毎ゝ日東光琴
ゝゝ月ゝ同ゝ逢ゝ事ゝ者祭

京大文字屋重郎雑屋三甫或大人ゝ言ゝ
芳琴ゝ一生ゝとゝ
短尺ゝ言ゝ

見まほしき梢にぬれぬ花ぞ蓑
姫松のかげにぬれぬ色やときはの蓑　大文字屋　重賴　雑屋　主甫

寄橋恋

あらのめてもらぬ仏をかけそへ乃　江戸町　花紫
つとわたるなる人うらの橋

かつらわたくさまよあつやふすまくれ　西田　九重
さてゝあ流れをいつまてのこゝろ

三浦内侍門小袖乃色不級ゝ花紫を付ゝ
武人長とゝ級不を乃ゝ初心ゝあ異級ゝ

流れをゝ身ハ仙命ゝ紀　義　紫　七光

夕立やう樣のやうまる日乃光　江戸町松葉屋　瀬川

名月

入相の人乃いとゝ七日の月　仝

永楽屋初春　三文字屋何うしう文より
鳳中をもいしうゝりてゝの矢

此末紙切レて古くなるもの

いさ桂　夜半亭宋阿加賀　和吉

芝新網漁翁漁夫詩

[illegible]

萱草

京町三浦内　小柴作

風の柳乃吹ぐまふぷちとふのあるとと宮しぷ指ミがらあす
世の中乃人せ公を波て去る。淺草川のちやきちつつて。
うゝ紀の波ア立ちませ。まつち山の松の嵐ふとそ松の夢
をさまさせ。つゝちぢのさゝぐしくさ。芝尾とつ宮の淺
あさ。せいさんくらちまぐ。ふるたそ。ますし芝の一ト毛
ムェホつひてつ宮ひさよすぐをぷそちと御分のしのミ
あゝさ。よゝ　枝生　とそて工

[illegible]

[illegible]

[illegible]

古哥　江戸町船田内
青柳

を[illegible]

足引の石葉を[illegible]る　青流
山もみちの小倉の山風の音　其尾
釋迦ハやつ弥陀ハまつくの石葉　一志
[illegible]の峰のもみち葉の物　記　来幾
古来示

眞間

梵宮絶路、板橋、霜。千里楓林雨露香、月落烏
啼、翰墨地。哀猿、葱客九回、腸

[illegible]鹿や先ハ石葉と[illegible]

愚遑

妙法の孫法用ふるや夏の初祭　松雅

初祭合て素問と

枝ごゝろ苔の根笠をみせまして　一氣

あるゝ初ちふの海はつきけ

六浦

時雨今は木ごゝろ有て寒し　巴人

はつうふ長襦袢を着　汐初祭　来示

きれ物

六月晦日　摧ぐ桃灯その初菓　沾洲

七日や日の白い　遊只

人初祭初瀬ゝ　和夕

先阿白兄才子うい鉢さけを　木戸

陸笠翁子ちゝ家ゝ一番六句

の字をむすひ初ちふて吟ゝ

詩四　その辞をそりゝ地景ふよう寸

きいくゝが濃ハ初ちふ油合　羽　来示

茄子　藁を姉カ切げゝ孝

馬糞掻ちれ代ゝの目蔵ち

ちゝひ書数の巻も丹の　棒

八島

口惜乃吉拓蘇不海ゑ書　古其齋

左右へ閑とする用閑の磐

畜所を智者ハすと云のこの世を

自ふ云むしハ紙幟なる

郎痛す修羅の歌ハ沖鱠

詩口ゆけ云あやはらく

松風

仏切とめられ侍ふ湯殿う

垢洗や云云神とめふ猿

玄実云云過云云香も畜の

示

神の蒼まけも帳を云云

むら石と閑しハつ花ふ結と意

あら杉毋しの市慢ハ狂活

黒塚

出書の示ハ已条云云

麻芋の糸ハ弦第の隅　齋

ころい合行すとてもつい形ど

さしも恨せ一閑の蒼麦切

第六鬼諸行わと結出云

嘘故嘩こしハ光畜の行

月夜座

石ハちらら拓蘇ふ雑

示

和をとらふ何か拙河豚
ふ石ませ之溝初る舟を繋き
見も虚空イ屐けく求ル
質経も流し貨秋の望月
秋ても飛ハ多もるもの
ちゝと雲霧の籬も高ハく　甘露
つゝ生くハも減うも　占
いさ我も載く妙もも仕見せ時
古を小酒ふ多の上をさて
酌迎よ妻ハ乾ル冨士も

山光信子誘餅中

饅頭賦

叙人

漢土の古へ諸葛亮瀘水の畔ありし
時羊の肉を麺小和し。偽人の首乃如小。傷所を
祭文を作て。河伯小祈しを始て。予考小饅頭
を好ミ給ふ。是は猥小丈功績と挙て報謝するのミ
夫饅頭の形しるし。上圓カ小して下方なり。円を天
方ハ地其を純白なるハ。混沌未分の相
を表し。中小餡と包めるハ。一圓相の中イ

物あまたいたる。古友知の形おのれ屋し。後しく
かの餡ハ黒土也。其味甘し。全体ハ出尾下平也
是金の形ハ其色白し。二ツハ分ハ二葉の形也
明る。其後口ハ醴の酢味あり。是木徳也。
しるハあるハ也頭が一皮下ハ深くしるを潤す。
此の釜ハ何ぞ。炉子の上ハ置てハ
急ハ色付婚ハ火の強ハ也。是肉ハ火氣を
含る。因氣ハ抜れバ心。是ハ陽ハ五行の備り
事必法也。扨又四時を以ハ時ハ。是ハ法の上ハ
を盤て害しるハ法なら雪のごとくして雪よりも白し

是を以て色を考へ。酸鹹ハ味ハ実の部
なるべし。9月海に焙の中ハ火蒸とくあるきを
まれて。頭ハ一ハ裏日の日ハ照ハ
光と夏の部を取へし。焼まんちの裏表赤く色付
なるを。ハ熟と見ちすとき。ハ秋と。
土用の甘き味ハ四つの時ハ
こ為を司る者也。是ハ人事ハ及し。以を四民
ハ以喻ハ也。ハ先祖ハ法葛孔明凱旋の時より義
ハ。ハ郎ハ本姓ハ士也。農ハ在ハ鍋ハ以のやつ
る。唐人林淨因ハ後裔武陽の塩瀬の家ハ掘

商家不止りて久しくなれり。以て商売いよ
菓子相兒ふるふるまねくハ工の部にも入べし。鳴子
饗以の世小道あり。四民ハ神祭ハ
和光同塵の神道にもけふへし。神前の供物と雖てハ
神祇を司り。仏壇の盛物と陽ハ雖教ハ文を。油
揚ハ歓喜天に上れハ商部と兼るか。かの艶廓
家この外面ハ家十前の結構と称上るハ。亦の部
法初限る面し。各者の部ハ口傳ハ知し。伝ハ。凡
老若男女諸の人法口ふよろこ[illegible]れハ。某民を
技業既す。是則頭ハ自己の仁堂より出て人ハ所を

仁堂ものハ。又曰餅と案と音を同しうす。部ハ仮中
ハ義を案ものハ。智と[illegible]も可ものハ。勇
ハ匹夫の小勇にハ[illegible]す。廣密ハ結撓ハ。利刀のハ[illegible]ハ
[illegible]。北宮黙ハ裏を[illegible]ものハ。宝ハ[illegible]ハ暑ハ
をつ[illegible]。是を以部ハ三位と兼るを知へし。アア
頭や大丈夫ととつへしと[illegible]。一の家問曰ハ大丈
夫とハ[illegible]ハ。男子の場のハ。女婦以ハ[illegible]ハ否や答ハ
姫[illegible]ハ有[illegible]。[illegible]ハ[illegible]ハ強き大象も
鼻をのむ[illegible]ハ酒桶の[illegible]ハ[illegible]
作頭ハ本姓城語ハ。醴の本作ハ米生ハ前を[illegible]ハ

海もちのなり。主体小麦の上粉と小豆の細末と沙糖の
煉蜜とを半三種和合して生まるもの。以院ホ生諸の
干菓子蒸菓子成皆頭の三種より產出さるる事
なし。是ハ江戸にて毛と稱す。受領の面こそ
以ての外に駄菓子なれ。遊廓屋の輩ハ云ふ。可笑可歎
下戸ハ皆食べし。上戸も彼之作られ舊恩を忘れ
寸法器をへらず。カステイラハ齋非時の獻立ホ除かれ。
華美なる山椒餅の類ハ杉揚枝ホ付くる。菖餅ハ多ホ
拾ふべし。牡丹餅ハ一生搗重ねあんこうばり
搗ホ搗ホ並べ。汁ホ上戸ホ叱らず。柏餅ハ
[illegible]

痛い目ホあり。サツサリたハ女性殺さる。固ふ出
てある面いぶ出りまいすりのや偶祖國子の猿ら蒸
へ[illegible]を栖あれ。餅菓子の仲買へられす。右の品
餅ハ一失あ事。[illegible]ハ一失の[illegible]風味[illegible]
[illegible]ふ。平ホ毒形し。蒸面する言位大人も蒸
[illegible]の生作ハ。園門籠中へ[illegible]。女中の[illegible]
[illegible]。麺[illegible]ホ法礼あ[illegible]。
餅の響應ハ鍋。汁を添へ蒸[illegible]
縁山開山忌の大餅ホ。胡椒湯[illegible]坂家
面一武ハ餅ホを切るも出すや切ハ昭まの

口伝あるべし。只且（カツカリ）新山（ニイヤマ）すゝ茶味なるべし。むかしの京ホ一人の長者あり。饂飩と好物にして。懂ホ方四五尺計の小鍋拵へて。朝夕ふたりの妻妾にくゝ家業をつとめ。異名をつけられ。ムの子ともうれ女なるのロすきとまるを。俗にいふ人物多しと雪げきいと淺ましと法ぶやきしが。あの人色を絲にて四三疊臺目三畳臺目の囲ひ内ホ猶味にて。茶屋のたぎり湯を加へ。ゆしてその饂飩と賞歌せり。結句して饂飩ゆゑ。ともけひてし。堀（ホリ）海苔（ノリ）の廣狀を編まじや。法もとりつ業法殆とあまてる。往じ茶治の頃。一人の

さんだらうとおもひ深川屋ホ商晄しく。粉賣女ホあづこ。已が名題をゆゑ。言甲斐なくして淡ましとこいひ。毛ある山（コヤ）云。彼京良のやど毛者が素孫ハ毛和あるうのムゝ峠のはんちゝ屋とれる。中下の饂飩を皮を内ホ。里沙糖を衣ホかけられ異名をだゝはんちゝ。四國ムゝかの里乃はんちゝ。ゆゑ沙糖をて二つ法ゝ合せられ。おせ饂飩とも。又比翼はんちゝ。ゝ。茶屋井ホ鞠はんちゝ。茶屋の人ゝハ見のをはんちゝ。閑饂飩の名。祝ハ大坂の瓢箪町ホ住。由ゝ。ゝかの茶ムゝ屋ゝ

元の眼鏡長者がうつゝにかゝてはんちゝらいしるの墓と伝へ侍る。東海道四日市杖つきのはんちゝ屋も根元なるべかりけれ。そゝぐるに生見世ゝふ夜の抹かゝしの一句をうりて。地ゝ日本六十餘州大小乃はんちゝ屋。老かんぢゝせどもこれ小拾牛の汗一梁下竟をかまくまんちゝ雪河市が学ぶ所下ゝ一ゝ不夜と家と投ゝ屋の暮るゝと候

讀饅頭賦

北越散人　石氏

東都に一奇物あり。饅頭賦といふ。ぞ書ゝ市ゝ

ゝ隣家より帰りて浮ゝれた。亭翁の文章の情に感ゝるものと盛ぶるゝ。ゝ寄よとゝ炉ゝ也姫の俤不賦の文淡泊ゝ。短夜の手ゝ枕睡ゝ像。扶ゝ勢賦と面に表ゝ。粥飯を思ふ所に。一座の秀風起ゝ。飄ゝ然ゝ一人の翁来ゝ。香と揖ゝ対ゝ立ゝ。其風色清雅ゝ。面圓ゝ方ゝ。身に狐の裘に梅の枝を濃ゝと服ゝ。以に唐貝の巾を戴ゝ杖の木ゝ杖を持ゝ。従ゝ家ゝ曰ゝ。主ゝ香と知ゝと。ゝ翁ゝ曰ゝ不ゝ知ゝ。翁ゝ悄然ゝ怪ゝ思ゝ曰ゝ僕ゝ是ゝ足下の家ゝ寒ゝ慰ゝ。足下の病ゝ瘡ゝ。足下乃

仏とまをす。足下の為に急幣を司る。足下の為に
方信を通じ。足下より切有り。勝てつかまつる。
ちなみに、ふハ何ぞや。男子ふ足下童子の誠言ふ香
周諭の詭計ふ無し。黄蓋が火攻ハ香と赤壁ふ破
らしめ。張郃ハ香と八味の謀あ香
足下の深ふ思ふ。香ハ夜ふ入ふ加ハ足ふ為
にはあらず。頃日関東都の一翁を新にて。香を賦
まと。文言我と漢にて。思ひ入れ
生す。且香ハ生まる所ハ。足下も亦翁ふ
驚かしめ。ひく香と漢ふ来の者と思へ。今詳ふ

足下ふ告ぐ我神職妙用ある事を云ふ。抑天地
開闢。切初のと自地ふ自ふの法味と出ふ本
是香遠祖とす。香ハ異国ふ孤とにて来ふ
といふ。雖卵のあるとは計り云ふ何ぞ信んぢるのとし
といまた。香ハ深く怖む。黄帝蚩尤と亡し給い
し時。まくの肉を取り菜併と用ふ。是ハ是を祝し
用ゆ。ハ四月三月白青の併を是ふ来ハ。ハ風ふ時
ふ。ハの字ハ香乃通字ふ来を知へし。
依く香ハ字を十字と呼ふ。則頭の併者也又戦国の
時ふ及ん。楚の屈原汨羅ふ沈死せしふ。麝下の

一将篠粽といへる者は中に入て。よく謀を廻せしも。香徳風
の高き寄こゝに。されども未だ知己の名将に逢遂ずして我を世に
顕す人なかりしに。孔明茅廬を出て蜀に仕へかしめ
南蛮を伐し時。瀘水の河伯を祭る事に及びて。始て香
不錫以の名残あらはれり。天下知べし。孔明ハ香が雋帽
子なる事を発をし。孔明が作り始めたるにハあらずと。本朝
に於ても神代のむかし。保食（ウケモチ）の神。猛紀命（ミコト）の害に逢ひ
し時。その頭の中より小麦及小豆生じ。続くのたまものの
生じ。今の世を鋪しなふ粽や餅我神祇なり
し。香が粗色の容服も。いまの何れ族まで由緒と知

る申し彼ウツカリヒヨシの河伯とて。孔明より賜ひし。香
を真の頭（ヅウ）肉と思ひしを懐（カヤス）来。人頭を代りにしたるれ
為時の手にハ信ぬあやし満んとおもふる。世の中の図縁（コトノニトイ）
我ともに餡に諸葛が知謀を伝へられ。世に稲歩
せしむる事忘れず。天暦の昔源の家に生れ。多田の満ん
おもひかへて武名を振ひ。後子へ遂て天窓（アタマ）子ハ哉
本形を顕し終に今の末までも川もし。駄
菓子煎餅も香が手下の者となりて満んぢう煎餅と名
寄へきた。大判小判なども。金銀に阿事（コモ子）。富貴に
謡ふ世上の姿なめきられさへあるに。近年東武

の源川を下ハ島わたり入ハ舟幽霊の
こゑのふ。音名を長ゝ丈ハ水ハ平ても。七五下乃火攻
ふせぎの多くハ。彼船ハ里の里いつきかゝいもあへす
ちゑくと音ゝと見るゝ寸笑ふとゝ見るぬらゝ。
ちもそゝと風爽きりし四面忽然と流嶺のめく
るゝ高がゝ。下驚愕ハ岩ゝ。高城嶺ゝ斗ふと
打ゝ。高ゝ下をゆきわ嶺ゝ。夏ハ襲ゝ
かゝ。覚ゝ傳ゝ煙中燈ゝの上ハ彼婦人
孤色ゝ多くハ集ゝ黒ゝくゝ
一つゝ出ハ付て拙ハ海ゝ

意鋪置譴而雅正諺而婉曲有議論有寓言有風刺奇ニ焉怪ニ焉狂態千變也渭稽萬化也以可解頤以可蹙嘆不佞偶一覽卷舒怳忽乎乘興率然而走筆漫書讚詞數字自覚杜撰贅語矣抑亦蛇足之畫耶水面之彩哉於是絶倒呵ニ曰

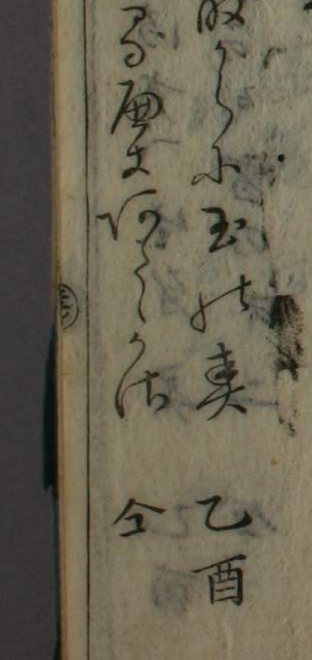
形象天地　上圓下方　色分清濁
内陰外陽　景具四節　氣含五行
薦獻神廟　供養佛堂　煉醴凝酪
如蜜如糖　貴賤愛好　老若嗜嘗

漢士始制　和國傳昌　賦讚畫義
徳名永芳

更詠饅頭四時興味

春日對花興味香　夏天樸熱口腸涼
秋宵捧白滿輪月　冬火煨爐詠雪嘗

饅頭四季詠



下　全　乙酉

海そちゆや恩あるかたへ生身矣　乙酉
まんちゝや葉チ糸のつる　雪の不二　仝

仝

饅頭や胡蝶の夢　伊場ちゝ　吳丈
まんちゝや花も牡丹の面あり　仝
饅頭や松蔭なる夏の霧　仝
乃魚市宇ちゝあて小袁のぬくもり　仝

仝

饅頭や菓子の名なる面　可然
海んちゝやちゝや持や　文　仝

東蝶菴

土大根のあるしの名を機一きめも
あるしゝや糸もまんちうを好ミ賞翫
すれうまとうらゝふ中ゝのゝ
けもあるされゝ
御代のまかゝや夜ゝ徐林のあんしもも
まくて南絃ゝまんちゝ異加ゝそ伝ゝ
中わと梅雨の法絃彩ゝ
上工の細工まてあゝ
き幸組の井樓小名影小江都やや
あゝ四家のまんちゝを四重小ゝわて
そゝゝゝ園二佳人也又主
ゝゝ一ゝ春く　の義句を系ゝ彩ゝ
見を盛吟し　面を立し好地ハ
ゝ岩ゝ友ゝ蒸籠も有
饅頭やけあつさ、まも婦のゝきて

叙文

鳥飼和泉

飼島の目ふはんちうや松人身　園二

虎屋織部

井樋ふ鶏もいちつるゐる友河原　仝

桔梗屋河内

名ひけあふさるゐ桔梗の偏乃鶏　仝

鈴木越後

まんちうふ雪の中とへも越浮ぶ　仝

狩野守之の家ふ伝て秘蔵の

毫あり故右をの時世て京師うく
毫をつくるまんちうやあるを
右をうふ狐の毛を以毫を作らせ
則常の筆名うてまんちう屋とふ
蛍工の書初ハ宝珠じまんちうもを形
均しく毫をてくく来由ましく餘ス
のみうやう彼毛頭の一毫を追加ス

書初ふ宝珠の形　もまんちう屋　千恕

西田屋
吉三郎

餘所や鍵の象

ふふまんちうとうるうの酒ふあるふ人の
拵ゐ@ゐしと香まる是を拵さいふ

か美下のうう宝めや　嘉祥堂

左十改
叙梁

饅頭誹諧歌仙

[illegible]や雛の婢子のあるにやう　叙人
庭の花まを　禮　数て見る　呑舟
曳[illegible]る　[illegible]　旧室
まゝごわとても　流れ　吳丈
風雅の外[illegible]も多　紀友の身　乙酉
二階[illegible]も高　[illegible]好す　旧
也[illegible]　[illegible]て　[illegible]れて　吳
[illegible]　[illegible]見ない　清水　乙
[illegible]　[illegible]　呑

[illegible]　叙
[illegible]　乙
[illegible]　吳
[illegible]　叙
[illegible]　吳
[illegible]　旧
[illegible]　叙
[illegible]　吳
[illegible]　旧
[illegible]　吳

一時ねさて一日もよしの　乙
伽経を引続てあふみの　叙
行人の躰をとるなる芸　芸
是らんもあつまる明舟の内　旧
子供の形に似もし闘持　三
立地て満ち蝶々の羽の揺るゝ　乙
立春は如来経の衣縁ぞ宿　旧
若葉の芽の尖きより流れの解　吾
亀の子の浮む浅き流れ絶申　乙
青柳の娘気なく村らに住　叙

山吹のこぼれ咲ける哀さ　芸
十きり物見まも居るいてまて紀　乙
網代打網も立ち語る後　叙
子らの花見に桜狩に降りしまよ　芸
秋の末買つし京へゆく　三
野分しも吹くに紙の浮島や　旧
いつまでも本来に依れる清きや　草
錦頂あるだく繕ひまるへし　華のなか　梨遊

君か代にかしこしや古律宗　雨尾
まんちうき甑のしらや宝の梅　思山
鏡研賦并引　齋一嘆
此鏡研の賦を道照翁の挿絵にそへ見んと附らる。
因を何にして筆硯を調へ文直く
香にすなはち足利前の友と露の働にも独ありし。
蓋くの高名を旅ゞし文細を流しまたるゝ。あやなく経
をゆるの理を明にす。擬定明堂にて鏡研の化を嘆く

これは古今の集作者と泉式部朝臣の素の家経賀
寛恵法師寛存者保鎮保宗徳忠綸殿秘蔵
殿亡者誰取細川兵法印下玄旨八条殿中院殿
為和殿と伝来して牡丹花老人肖柏に伝へ給
ふ鏡作文稀しる。なをまた此鏡研に伝へし
をきんちうに伝を得して。今年のくれにちかつく
をあはれとさに此書も子孫の家に伝へて拝揮
尓時平の一後州にあそひぬ
まつちるの源氏の誉代此業子
いつもくれならのまんちう

跋

洞房を唐土の楼廊に名預れば日城を中溢觴
芸國所に移る近江の涉妻出羽の坂田
橋殿の宮津おと吉野物語の相馬の別
と武陽 御府内の吉原とうたふ 天下泰平の
柳四海泰平民安全の浮町に遊女の彩り芸乱
猥なる中も有る式の頃 庄司甚右衛門
といひし人情恩深を夢の一廓を賜ひ吉原と名付
御代益長久なるゆへ不廓も亦日に不繁栄
きわまりて 和文齋庄司翁の嫡孫なる

ヒホ不の吏多生し篤実にして壮年よりの故実
を好まず久しく苦心を内面に
のみ好まれ。一藝に秀でし人或は艶書
端唄の多きを恥とも悪く書を先生に於て棹て
ちりぬる絵全部三冊に彩畫
嗚呼輯中不あるいは人追福修善不
頼らせよわ心の書より移こはうるさ。時是
談佛祭の因縁を以て出版あるべき人に
を付て百年ら来乃人に渇まるう
ものと。将家を思ひ亦朋友の交

不敏なれども文法は苦し。おもふ日
そなへ給へ来り示す。波林猶へとなり。こゝろの示す
奴梁不敏不才なれども追ひ及ばんとへども不許
默止かたし。元孤に免れ難き人咲ふべきなり
こゝも書を呼出し一面を綴り先老後乃
涼計なり。竹門散人題志退屑菴誠

自筆秋吉原源氏のうゝ

祝言

桑の弓蓬乃矢れ御改まさに月出るや
五日の風を万木治て十日の面よ華開て
徳澤ハ先業つゝふり東都八百八町の秋。主陽よ
咲る業の寿稔。江戸川の流波とはきに
月の時かたゝ奴材のめふゝ。木陰よ持ハ比叡之尼
の。堀を撃て信ゝいたく
君を千代ましませ。上下
万年かゝの時代や

庄司道恕齋頓首謹言

元文三戊午年八月吉旦

文政五壬午年迄八十五年

寛延三庚午年正月吉日

京麩屋長兵衛求板

洞房語園大尾

曙櫻
曙櫻

大ヤ